

昭和20年12月1日第3種郵便物認可 平成8年5月1日発行(毎月1回1日発行)1338号第111年第6号

中央公論

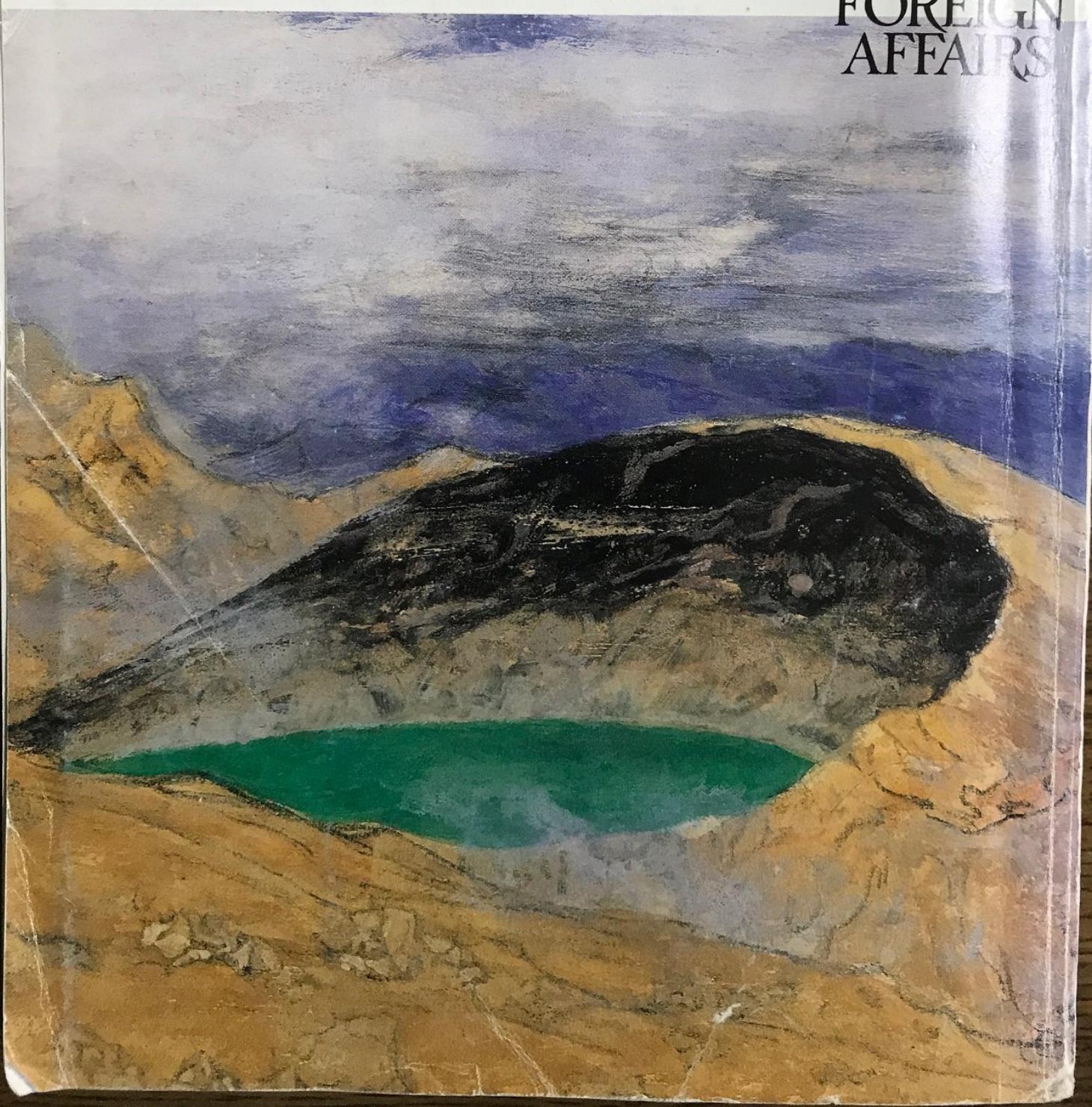
われら体験的大蔵批判 佐々淳行 長富祐一郎

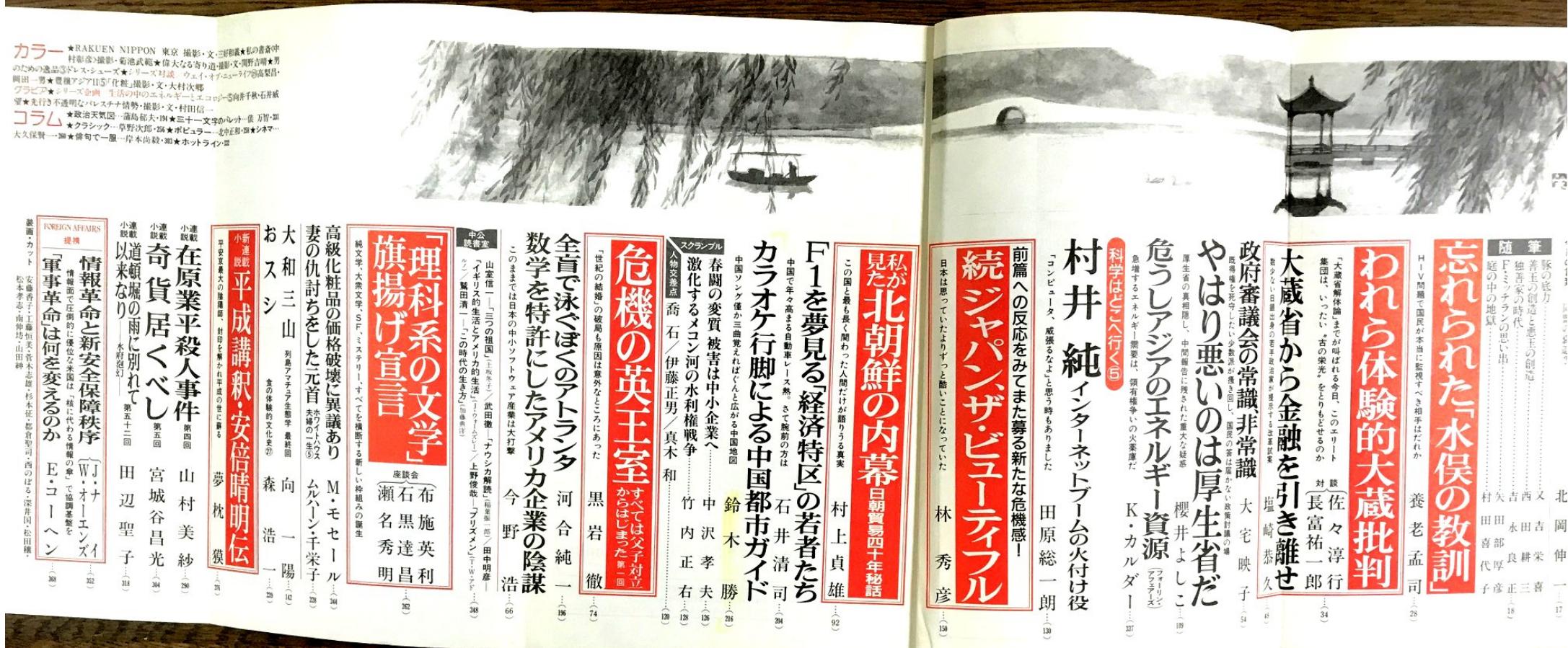
やはり悪いのは厚生省だ 櫻井よしこ

北朝鮮の内幕 日朝貿易40年秘話

5

FOREIGN
AFFAIRS





カラオケ行脚による中国都市ガイド

鈴木 勝

中国的都市は開放されてきたとはいえ、外国人にはまだ窮屈だ
その中で寛げる場所はといえば、カラオケ・クラブが最適だろう
中国語ソングを三曲さげて街に出れば、広く中国社会が見えてくる

カラOK行脚の効用

カラオケ小姐「せっかく、中国に来た
のだから中国の歌をおぼえたら？」
私「むずかしいヨ。日本語でもカラオ
ケはどうも苦手で……」
カラオケ小姐「一緒に歌つてあげるか
ら。やさしい歌の『月亮代表我的心』
(お月さんは私の心を知っている) ぐらいか
ら始めたら？」
私「じゃ一、二週間ぐらいください。
練習しますから……」

ット・テープが演奏する」の意。この言葉に英語の「OK」を結合させている。

こんな奇妙な文字が北京にも上海にも氾濫している。そんな中国に駐在し、中国の歌を覚えたばかりに、「中国語・卡拉OK」に魅かれ、日本人や中国人の老朋友(親友)とともに、時には一人で、足繁く通うことになってしまった。中国の生活は以前と比べ、かなり開放され始めたとはいえ、窮屈であることに変わりはない。そんな環境の中で寛げる場所といえば、カラオケ・クラブが適當だ。日本からのビジネスマンやツーリストにとっても、フォーマルな雰囲気から抜け出し、短時間でも中国のやわらかな空気を吸える場所の一つとして、適した所だ。しかし、カラオケ・クラブはホントの中国を映す場所ではないといふ人もいる。



これは中国駐在生活に少しばかり慣れ

た頃の北京のカラオケ・クラブでの会話。「你好」、「再見」、「謝謝」だけの中國語の会話力で北京に赴任。一年ほど経過しても言葉の進歩はそれほどでなく、もちろん、中国語の歌なんて遠い存在。

とにかく、約束は約束。早速、北京の銀座といわれる「王府井」に行き、歌詞つきカセットテープを購入。拡大コピーの余白にビンイン(ローマ字つづり)で発音をふり、意味を調べて書き添えた。自分の部屋で練習するしかない。そして、約

束の二週間。件の小姐と覚えたての歌をうたう。結構いた。変な自信が湧いてきた。しばらくその一曲を続けたが、他の中国語の歌にも挑戦しなくなつた。それからは聞き覚えのある歌のテープを手当たり次第に買い求め、結局、日本に帰国する頃には一〇〇曲近くにチャレンジすることになつてしまつた。

ところで、「改革・開放の波」が吹き荒れる最近の中国は日本以上のカラオケ・ブーム。その中国ではカラオケを「カラOK」と書く。「カラ」とは直訳で「カセ

それ以上に「中国語・カラOK行脚」の効用はいろいろある。

まず、その一。「カラオケは政治・世界の『个体』いわゆる個人経営者などだけだという意見もある。しかし、現在は経済的にもカラオケへ行ける層の裾野は急激に拡がり、大衆の動きを反映する所となつてゐる。また、カラオケ・クラブは「悪の温床」ともいわれている。ぶつたりや暴力などの危険もはらんでいる。だから、「カラOK行脚」などはとても勧められないという人もいる。たしかに、最近の上海や深圳などの夜の街には危険な所が多くなつてきている。北京にもこんな風潮が出来てきていることはたしか。しかし、多少のスリルはあるものの、それなりの注意をすればそんな危険は避けられる。



JTBワールド・アジア部長。1945年千葉県生まれ。67年早稲田大学商学部卒業、JTB(日本交通公社)入社。JTBショードニー支店次長として豪州に駐在(5年間)。後に天安門事件前後4年間、北京事務所長として中国に駐在。帰国後、現職。著書に『オーストラリア学入門』『コアラの国』(早稲田経営出版)。近々、『中国にうまく滞在する法—北京駐在1450日』(日中出版)を上梓。本誌95年5月号に『中国的社交術』指南を寄稿。

のものであつた。かくして、その会議の

期間中のカラオケ・クラブには三陪小姐もいなく、なんとも湿っぽい夜のエンターテインメントとなってしまった。また

「放」になりすぎた近頃の傾向を戒めるために「カラオケ・クラブでは『愛国歌』を五五曲入れるべし!」のアナクロ的条例が出されたのはつい最近のこと。

効用その二。「カラオケは人治社会でのビジネス成功術」。『人治の国・中国』ではいかに老朋友になるか? 従来は宴会が主流だったが最近では新たな形態「宴会」プラス「カラオケ」が出てきた。カラオケ・タイムに中国語ソングが登場すればビジネスで難題を吹っかける中國側も急接近することまちがいない。

効用その三。「カラオケは中国語スピード習得術」。日常の挨拶だけの言葉からもう一步踏み出したい人に、また、これから中国に旅しようとする人に、そして、仕事で中国にというビジネスマンに勧めます。歌の数が増えるにつれて、会話も上達することを保証します。とにかく、「你好」、「再见」、「謝謝」の中国語

派手になりすぎたため、営業ができなくなってしまったんだ。

守衛にガードされた

「超」安全卡拉OK

前述の「釣魚俱樂部」のマスターや小姐たちが大挙して移り、営業を開始したクラブだ。日本の「銀座」の名前を拝借。市心の北海公園からやや離れた北京市の北側を走る三環路に沿つたところにオープン。広い敷地内の大好きな建物の一角を借りての営業で、スペースは以前と比べて三倍ぐらい大きい。引っ越した直後、マスターは早速、重要顧客(?)の一人の私に以前の「釣魚俱樂部」との比較を尋ねてきた。中国人は広い場所を好み、日本人はちゃんとした個室的な雰囲気を好むのが一般的だ。

「もし、日本人客をターゲットにするなら、広い場所でも個室的な雰囲気をかもしだしたほうがいい」とアドバイスを急速、具申。また、「ステージを設置し、スクリーンを備えるのはよいが、壇上の歌い手は他のお客に『尻』を向けないほ

の会話力から、からうじて中国語で電話やら手紙が書ける程度になつた私は中国語の歌のお陰だと思っている。

効用その四。「カラオケは海外中国人社会・熟知術」。これは中国以外の海外行脚に対してのことだが、中国語ソングを三曲さげて街に出ればアジア、世界がさらに広くそして深く見えることにならぬ。こんな効用論を『隠れ蓑』にして北京だけに飽き足らず、中国各地のクラブまで足を伸ばしてしまつた。そして、北編』はあった。では、『中国語・卡拉OK行脚』に出発! まず、北京の街に。

中国政府『お墨付き』カラOK

カラオケ・クラブの領収書を貰つてビックリ。「釣魚俱樂部」だ。こんなオドロキのクラブ、それも北京のド真ん中の北海公園の中。『中南海』(政府の要人が住居を構える地域)のすぐ近くに位置する。入口には、煤けて年月を経た『釣魚俱樂部』の看板があり、一般の人にはこれが

うがよいですヨ』などの提言をするコンサルタントに変身。時折、そのカラオケのマダムが有名な歌やら新曲のテープをプレゼントしてくれた。顧問料の印などだろうか? そのクラブのメンバーは前とほとんど変わらない。前よりか規模も大きくなり小島の数も多くなつたが、昼間は学生だ。「指名制」が出来てきたのは目新しい。しかし、指名料はとらない。事前に電話すれば、指名した小姐がサビスしてくれるし、デュエットで歌ってくれる。

ところで、この『銀座俱樂部』は市内から離れているので、ほとんどはタクシーなどでやつてくる。この俱樂部の建物は敷地内の中にある、そこに行くには守衛のいる場所を通過しなければならない。守衛の誰か何に対する『出租车』(タクシ)をいつたん止めて、窓から首を出して叫ばなければならぬ。「ヒラケゴマ!」ならぬ「カラオケ!」と叫べばよい。すかさず、「請! (どうぞ)」のサインをしてくれる。こんな守衛にガードされてい

「小皇帝」&爺爺・奶奶連れ

カラオケ・クラブ『伴月城』は規模といい、レベルといい、北京では三本の指に入るくらいのよさ。豪華なステージ、大きなスクリーン、ところどころにピデオ、そしてダンスができるフロアー付きで、デラックスな雰囲気だ。このタイプを中国人は好む。ここではほとんど、中国人がお客様、外国人の姿はめったに見られない。多彩なお客。若いカップルが立つが、年配も少なくない。珍しいのは立つが、年配も少なくない。珍しいのは子供連れだ。通常なら子供は連れて行かないし、店のほうも断わる。「一人っ子」政策を推進する中国の特色なのかもしれない。今の中国は二人以上の子供を生んだ場合、罰金の対象となる。したがって、一人しかいない子供は当然、大事に育て

カラオケだとは絶対思われない。

こんなふうだから、お客はクチコミでやつてくるしかない。夜十二時を過ぎれば、公園の中は真っ暗。黒っぽい布でできた厚い垂れ幕で遮断すれば、完全に別世界。『つり竿』ならぬマイクをにぎりしめた「カラオケ太公望」がいるなんて、誰も信じない。「深夜十二時以降は営業禁止」といわれているカラオケ営業にちょっぴり違反し、これまた『ご法度』の「カラオケ小姐を横にはべらし下暗し」で中国の公安の目が届いていない、というのだろうか。ひょっとすると「公安も見ていて安心」という具合なのかもしれない。こんな交通至便で、サービスも体験できる場所だ。「灯台下暗し」で中国の公安の目が届いていない、というのだろうか。ひょっとすると「公安も見ていて安心」という具合なのかもしれない。こんな交通至便で、サービスも体験できる場所だ。「灯台下暗し」で中国の公安の目が届いていない、というのだろうか。ひょっとすると「公安も見ていて安心」という具合なの

かもしれない。こんな交通至便で、サービスも体験できる場所だ。「灯台下暗し」で中国の公安の目が届いていない、というのだろうか。ひょっとすると「公安も見ていて安心」という具合なのかもしれない。こんな交通至便で、サービスも体験できる場所だ。「灯台下暗し」で中国の公安の目が届いていない、というのだろうか。ひょっとすると「公安も見ていて安心」という具合なの

「第二職業」の先取り
天安門事件前後の話だ。北京のカラオケがちょっと賑やかになりはじめの頃、朝鮮族出身の夫婦がカラオケ・クラブを開設した。この夫婦はまことに働くせいから、また日本語の歌が多くなったためか、日本人駐在員の出入りが多かった。改革・開放政策の進展で、中国・韓国の交流もはじまり、韓国からの投資も始まった。それまでは北朝鮮の人が大部分であつたが、急激に韓国人の姿が増えってきた。街中にはメイド・イン・コリア製品のハングル宣伝も目立つよくなつた。

そんな時期に、ハングルのカラオケを置いていたため、この店にも多くの韓国ビジネスマンが訪れるようになつた。それまでの雰囲気がガラリと変わり、日本人は敬遠するようになつた。朝鮮族夫婦の経営ではあつたが、日本に留学したり姐妹のためか、精力的に働くマダムのおかげか、このカラオケは連日、おお賑わいだ。

「第二職業」の先取り



アナウンス娘（一次は鈴木先生の「怡悦人尔的温柔」（あなたの優しさのように）で、す）。こんなに大きな声で呼び出しを受けたのは、はじめてだ。少し、ドキドキ。しかし、周りは中国人ばかりで、知り合いもないことだ。構うもんか！ 中国語で歌いはじめる。そして、素人の歌い手が続く。

られ、甘やかされ、いばつた存在となる。こんなところから「小皇帝」と呼ばれていたが、そんな一人っ子が夜遅くまでカラオケ・クラブにいる。そう言えば、おじいさん（爺爺）、おばあさん（奶奶）までついてきている。まるで一族郎党でエンジョイ・カラオケだ。さて、カラオケ・タイムの始まり。車前に申し込みフォームは配られている。アナウンス嬢のかわいい声が広いクラブ全体に響き渡る。

ロシア人小姐のサリビアふり

「西城文化会館」、ここは個人経営のサクセス・ストーリーのヒロインだ。一〇年ほど前には北京の郊外・明の十三陵で観光客相手に土産品をほそぼそ売っていたという。今では北京に四階建てのショッピング・センターを持ち、夜にはこの俱楽部を経営している。北京には数少ない自家用車のオーナーでもある。このマダムは精力的に動き回っている。

ロシア人小姐のサービスぶり

しかし、そんなサービスなのに人気がある。同行の中国人仲間を観察すると、ニコニコと話しかけ、反対に“ホスト”になつてゐる。よほど、ロシア人が珍しいのだろうか、それとも中国人と違った顔・形に興味があるのかもしれない。一方、“ニコニコされないこと”は中国のお家芸で、慣れたものである。いまさら目くじら立てるほどのものでないのかも

とこぼしていた。現在、流行りの「第二職業」の先端を走っていたことになる。いまでは北京や上海ではあたりまえになつた第二職業もその頃は珍しかつた。

第二職業とは能力と時間を生かし、ウイーク・デーの夜や日曜日にアルバイトすることだ。飲食業、サービス業、夜学の先生、セールスマン、理髪師など、多種多様。カラオケ小姐などもとつておきのアルバイトだ。「美恵」と呼ばれて、親しまれていた卡拉OK俱楽部もある。晩、「閉店」の看板が掲げられていた。

公安の“検査”も大丈夫

一古都横濱俱楽部^{ホリデイズ}は國務院が投資をするある五つ星の飯店の一階にオープンした。カラオケ。不思議なことにこのホテルには二階にもカラオケ・クラブがある。二階は外国人向け。歌のメニューには英語、日本語、そしてもちろん中國語も取扱えられているが、料金は地元の中国人にはとうてい払えないような額だ。二階のほうは中國人向け。歌は中國語が中

さて、このクラブの小姐たちは昼間は学校に、夜はカラオケにという学生がほとんど。なかでも異色なのは昼間は病院勤めの女医さん。ある時、昼間の病院勤める店に戻った。

グル宣伝も目立つようになつた。そんな時期に、ハングルのカラオケを置いていたため、この店にも多くの韓国ビジネスマンが訪れるようになつた。それまでの雰囲気がガラリと変わり、日本人は敬遠するようになつた。朝鮮族夫婦の経営ではあつたが、日本に留学したり

ソ連邦の瓦解の後、多くのロシア人が中国にやってくるようになった。そんなロシア人に、「いちはやく目をつけて、カラオケ小姐にしよう!」なんてアイデアは立派なものだ。ハバロフスクの「ナターランヤ」をはじめとして、三人の

心。金額も中国人に入りやすい。しかし、

効率的な営業はといえば、一つのホテル

に二つのカラオケは必要ないだろう。とにかく、しばらくは存続していた。そのうち、理由はわからないが、一階の外国人向けは閉店した。どんなにカラオケ・ブームだといても、毎晩二つを満員にさせるのは至難の業だ。

桂林を訪問した時のエビソード。卡拉OK俱楽部の入場料だ。中国人六〇元、台湾・香港同胞六〇元、外国人九〇元、

これは名にしおう中国政府の推進する二重価格だ。故宮、人民大会堂、美術館などの入場券、万里の長城のケーブルカード金、国内航空運賃など、二重価格が多い。カラオケまでスペシャル・レートだ。「一つの飯店に二つのカラOK俱楽部を作る」政策は中国のこんな二重価格システムに対応する、「苦肉の策」なのかもしれない。しかし、ホテルのカラオケは一つになってしまった。営業的理由なのか、他の問題なのか定かではないが、「営業効率」を唱えだした中国の企業経営政策と時期が同じだ。

さて、合弁カラオケ事業第一号らしく、日本人ママを除いてプロは誰もいない。中国人の男性チーフは日本語がしゃべれるだけの旅行会社の社員。小姐はまつたくの素人。毎日の営業で冷や汗をかくのは件のママだけだと推察すると、気の毒この上ない。中国のサービス産業の「播籠期」だ。

ダイニングカラOK

「食の国・中国」。『歌うこと』と『食べること』とが結びつくのは当然の成り行きかもしれない。「カラOK鑑店」、いわゆる、『カラオケ・レストラン』の登場だ。レストランで歌う。大きなスクリーンやステージ、なんといつても珍しいのはお客様なら我慢もできよう。下手な歌では料理もまずくなるというものだ。

しかし、心配ご無用。日本人の感覚と中国人のそれはまったく違う。なんとなれば、中国人の食事風景を想像してください。あなたの歌を目の前にして熱唱する。上手な歌なら我慢もできよう。下手な歌では料理もまずくなるというものだ。

中国人のそれはまったく違う。なんとなれば、ワイワイガヤガヤと食べている中国人の食事の雰囲気に他人の歌は入って

多いということで有名。日本の『FOCUS』とか、『FRIDAY』とかで紹介されたこともある。すでに紹介した『三陪』の中の「陪座」すなわち、「お客様の傍らに座つてサービスをする」をせず、ホステスはテーブル越しに座る仕組みか、立つたままのサービスが基本であった。オープンしたてはその調子だったが、その後横に座つてのサービスに変わつていった。

しかし、ある晩、全員が立っている。今は公安の見回りがあるという。これを「抜き打ちだ」という。ある筋から事前に連絡を受けたのだ。しばらくして、公安らしき見回り官数人が現われて、お客様の歌うのを数曲聞いた後、引き上げといった。全員が出るやいなや小姐たちはお客様の側に座り、いつものようにすました顔でサービスを開始した。

中国は「関係学（コネ）の国」だといわれているが、ここのかラオケ店長は日頃からこれをうまく駆使している。しかし、あんなに流行つていたのにしばらくしてクローズされた。とにかく、理由はこない。たとえ、食事以外の時でも他人の上手い下手は気にしないのが中国人気質だ。こんな「カラOK鑑店」がけつこう流行つてお客様の出入りも賑やかだ。その頃、北京日報だか、晚报だかの新聞にもそんな「カラオケ・レストラン」の繁盛ぶりが紹介された。

露店のカラOK

さて、北京を離れたローカル色豊かな地方都市を紹介しよう。まず、古の都の西安に。「長安」の都として一〇〇〇年以上の榮華を極めた西安は、いまでも世界中からの観光客が引きもきらない。こんな歴史のある都市も、街を歩けば人や自転車の洪流で、歴史の街のイメージを感じさせない。騒々しい街をキヨロキヨ

ある賑やかな店先にやつてきた。店の前には三、四卓のテーブルが置かれ、お客様が何人か座り、その中の一人がマイクを握り、店先に設置されたビデオ画面を見ながら声を張り上げている。「露店カラOK」いわゆる「ストリート・カラオケ」だ。

最近、外国企業とのさまざまな合弁事業がでてきているが、カラオケ営業の分野もその例外ではない。「成沙」、この店は日中合弁・カラOK俱楽部の第一号だ。新宿で活躍していたというプロのマニアを日本から派遣してきた本格的なクラブである。このママは常にきもの姿で接客し、礼儀作法も日本流を徹底的に教える。

このようにサービスは徹底していたが、料金も北京で一、二番。入口を通り、クラブの小姐やスタッフ一同が日本のお辞儀をして、「いらっしゃいませ」を唱和。当のママは一切中国語をしゃべらず、日本語で毅然とした態度で押し通す。圧倒された中国人小姐は懸命に日本語を習う始末。とにかく、金額的にもそうだが、この雰囲気では地元の中国人が来れるような所ではない。日本人のビジネスマンや観光客が中心。中国人がチラホラ混じつているのは日本人に招待されただお得意か、時には香港や台湾からのビタミンだ。

このようにサービスは徹底していたが、料金も北京で一、二番。入口を通り、クラブの小姐やスタッフ一同が日本のお辞儀をして、「いらっしゃいませ」を唱和。当のママは一切中国語をしゃべらず、日本語で毅然とした態度で押し通す。圧倒された中国人小姐は懸命に日本語を習う始末。とにかく、金額的にもそうだが、この雰囲気では地元の中国人が来れるような所ではない。日本人のビジネスマンや観光客が中心。中国人がチラホラ混じつているのは日本人に招待されただお得意か、時には香港や台湾からのビタミンだ。

このようにサービスは徹底していたが、料金も北京で一、二番。入口を通り、クラブの小姐やスタッフ一同が日本のお辞儀をして、「いらっしゃいませ」を唱和。当のママは一切中国語をしゃべらず、日本語で毅然とした態度で押し通す。圧倒された中国人小姐は懸命に日本語を習う始末。とにかく、金額的にもそうだが、この雰囲気では地元の中国人が来れるような所ではない。日本人のビジネスマンや観光客が中心。中国人がチラホラ混じつているのは日本人に招待されただお得意か、時には香港や台湾からのビタミンだ。

日中合弁第一号カラOK

このようにサービスは徹底していたが、料金も北京で一、二番。入口を通り、クラブの小姐やスタッフ一同が日本のお辞儀をして、「いらっしゃいませ」を唱和。当のママは一切中国語をしゃべらず、日本語で毅然とした態度で押し通す。圧倒された中国人小姐は懸命に日本語を習う始末。とにかく、金額的にもそうだが、この雰囲気では地元の中国人が来れるような所ではない。日本人のビジネスマンや観光客が中心。中国人がチラホラ混じつているのは日本人に招待されただお得意か、時には香港や台湾からのビタミンだ。

このようにサービスは徹底していたが、料金も北京で一、二番。入口を通り、クラブの小姐やスタッフ一同が日本のお辞儀をして、「いらっしゃいませ」を唱和。当のママは一切中国語をしゃべらず、日本語で毅然とした態度で押し通す。圧倒された中国人小姐は懸命に日本語を習う始末。とにかく、金額的にもそうだが、この雰囲気では地元の中国人が来れるような所ではない。日本人のビジネスマンや観光客が中心。中国人がチラホラ混じつているのは日本人に招待されただお得意か、時には香港や台湾からのビタミンだ。

このようにサービスは徹底していたが、料金も北京で一、二番。入口を通り、クラブの小姐やスタッフ一同が日本のお辞儀をして、「いらっしゃいませ」を唱和。当のママは一切中国語をしゃべらず、日本語で毅然とした態度で押し通す。圧倒された中国人小姐は懸命に日本語を習う始末。とにかく、金額的にもそうだが、この雰囲気では地元の中国人が来れるような所ではない。日本人のビジネスマンや観光客が中心。中国人がチラホラ混じつているのは日本人に招待されただお得意か、時には香港や台湾からのビタミンだ。

“牡丹の街”のカラOK

河南省の洛陽は西安と並ぶ歴史の街。李白、杜甫、白居易などの歴史上の詩人が中国文化を高めた地だ。この洛陽は牡丹で有名。毎年四月になると、一斉に咲き揃う。

ある年の牡丹節に招待された。王城公園の中の牡丹を愛で、さすがは「花の中の王」とその素晴らしさに感嘆し、夜は例によつて歓迎宴に招待された。その後は有志に連れられて、その街で一番とうホテル内のクラブに繰り出した。ダンス場とカラオケがある場所だ。かなりの混みよう。もちろん、外国人は私だけだつた。

カラオケには多くの申し込みがあり、なかなかまわつてしまふにない。しかし、他人の中国の歌を聞いたり、歌つている格好を見るだけでも楽しい。やや暗くてムードもあり、ローカルとしては立派な施設だ。その頃、中国語の歌のレパートリーもそれほどでもないが、中国側のむりやりのリクエストを受け、同行のい。この歌に合わせて広いフロアで大勢踊っている。若いカップルも多いが、年配者もかなりだ。外国人はひとりもない。ちよど、ダンシング・タジンの声で“カラオケ・タイム”が始まつた。結構、うまい。音響効果もバツグンだ。「いなかの太原」とみくびついたが、こんなところにこんな設備があるなんて、中国がわからなくなつてしまふ。北京から遠く離れたローカルにも中国の改革・開放の波は急速に拡がつている。

“中国のハワイ”的カラOK

中国にも「ハネムーン」が登場してきた。人気のNO・1は「中国のハワイ」と呼ばれる海南島。中国唯一の亜熱帯気候地帯に属し、冬でも海水浴ができる場所。温和な気候に加えて、他の省では見られない風光明媚な景色が所々に。観光的要素だけではない。「経済特別区」の一つとして、めざましい経済的発展を遂げている。こんな海南島にもカラオケは進出している。



歌つた。

その時、「人込みの中に市長も来ていますヨ」。そばに座つていた地元の有力者が「市長を紹介しましよう!」といふことになり、早速、簡単に挨拶。夜のこんななごやかな場所で仕事の話は無粋だが、「日本からの観光客が増えるよう、お互いに頑張りましょう」という会話に進展した。通常、なかなか会えない人物に会うことができ、その上、仕事の話にも言及。中国のカラオケ・クラブはビジネスの場所としての役割をちょっぴり果たしている。

田舎カラOK?

山西省の省都「太原」。といつても今日本人にはそれほどナジミはない。北京から西南に五〇〇キロ余、特快列車で約九時間。この省の大同石窟は「中国の三大石窟」の一つとして名を馳せていく。また、聖なる五台山があるところとして有名だ。この五台山を巡り、太原の街に来た。

夜は地域の観光振興のオエラガタとの軒数も多いが、営業形態も北京とはずいぶん違う。深夜十二時の営業終了なんて、ここではさっぱり守られていないし、果たして、そんな通告が到達しているか疑いたくなる。数人で海南島のカラ

ものはない。てつとり早く外貨を稼ぐに

は、海外からの観光客を誘致することだ。しかし、この省の観光宣伝はまだまだ。どんな方法が、と議論は続く。しかし、そんな話はいつしか中止され、宴会が盛り上がる。北京では縁が薄くなつてきたマオタイ酒が出されるちょっぴりリッチな晩だ。なぜなら、高価なマオタイ酒は国内の宴会では慎むようにオフレイド。なぜなら、高価なマオタイ酒が出ているという。そんな高価な酒は輸出にまわして、外貨を稼ぐようにということだ。「乾杯!」「乾杯!」で一次会が終了。

今まで「二次会のない国・中国」といわれてきたが、最近、大きくチエンジした。カラOK俱楽部などが登場したためだ。中国人のライフスタイルは流動的だ。

観光振興の旗振りの一人が「田舎のカラOKでもどうぞ」と、案内してくれたのは予想に反して立派なビル。階段を上がって、四階に。暗いドアを開けると大勢の人でぎやかだ。これがカラオケ? 中央にライトが当たってらつてるのは、テムになつていて。歌詞は中国語ばかり。香港が近く、そこからのお客が多いという。しかし、なにかへんな造りだ。だんだんわかつってきたことは、カラオケと違う商売もくろんでいるらしい。

カラオケ小姐がセールス・トークを始めた。そういうえば、表のテーブルに白人が座つていて、話していたのはこんな目的だったのか。さて、こんなカラオケもあるが、海南島では「ボート・カラオケ」が有名だ。この島の南の三亞。市内を歩くと入江があり、そこには水上生活者が住むたくさんのが係留されている。そんな水上の生活者にも陸上の人々に負けないようなカラオケが発明されているのだ。

外国人価格のカラOK

中国に赴任して間もない頃、南部の桂林を訪問した。漓江下りを始めとして、水墨画の風景はまさしく「桂林山水甲天下」(桂林の山水は天下で一番だ)と感じ入った。こんな屋間の観光につられて、夜の桂林もまたすばらしかろうと、歩き回り、一番前にカラオケ・セットが置かれ、店の小姐にリクエスト票を出すシス

K」の文字が目に入った。その頃はこの文字はまだ珍しい。

入口をのぞくと、看板の横に料金表が見えた。外国人九〇元、香港・台湾同胞六〇元、内国人六〇元。前にも述べたように有名な中国の二重価格だ。香港・台湾同胞はこのスペシャル・レートに気を

良くてか、店は台湾人や香港人でいっぱい。反対に九〇元で感情を害した外国人は、私を除いて皆無だ。

中国駐在したての頃の話なので、中国語はわからないし、チャイニーズ・ソングも一曲も歌えない。その時に、そんなカラオケの二重価格制度に抗議しようとした。なぜなら、中国語カラオケに行つても、外国人は一般に歌えないし、また他人の歌を聞いてもそれを理解できずエンジョイもできない、となると反対に六〇元以下、もしくは半額くらいにすべき。しかし、その後、一律になつたので抗議はやめた。

さて、中国の二重価格制度はいまだに残っている。カラOK俱楽部でなくなつたのが、なぜだかわからぬ。次のように

深圳のカラOK

中国の「改革・開放のリーダー」として自他ともに認める深圳。そのためまさしさは隣の香港を追い抜く勢いだ。中国でのビジネス・チャンスを求めて、世界中から多くの人がひっきりなし。香港から列車で羅湖で下車。入国管理局事務所には西欧人・東洋人のビジネスマンが長蛇の列。その事務所をぬけてやっと深圳に到着。

深圳きつての五つ星のシャングリラ・ホテルは今日も満員らしい。ここは観光客でなく、ビジネス出張者が大半だ。その証拠にビュッフェ形式の朝食から男性陣のビジネス・トーキーが始まっている。生幣の人民元でなく、香港ドルが使われているのは不思議だ。

こんな気ぜわしいビジネスマンをエンターテインしようと、夜の部にもぎやかだ。その一つにカラオケ・クラブは欠か

カラオケ行脚による中国都市ガイド

革・開放で中国人の懐具合はよくなつてきただろう。『その二』「カラOKは悪の温床」という意見もある。二重価格制度の推進はその温床のカラオケを政府が奨励することになる、と考えたのかもしれない。

上海ビジネスカラOK

上海は改革・開放の先頭集團にいる。

最近、上海の人々の生活はかなり豊かになつた。半面、社会的富の歪みで犯罪の増加を招いている。「向錢看」の悪弊が蔓延している。これは「向前看」で、常に前を見て歩こうをもじつた言葉で、「押金主義」を指す。こんな主義の一端か、タクシーでの「ぶつたくり」やホテルでの過度のチップの要求なども横行し、夜のカラオケでのトラブルも少なくない。上海では特にひどいという情報が多くたせいか、上海への訪問が多いわりには、「中国語・カラOK行脚」の題材がいたつて乏しい。

「上海は一人ではご用心!」。したがつ

せない。しかし、悪質なカラオケ・クラブにはくれぐれもご注意を、とガイドブックはいう。

かくして、安全といわれるシャングリラ・ホテル内の「亞洲西餐・卡拉OK酒樓」に出かけた。大きなスクリーン、ダンス・フロア、ボックス席・カウンターで、豪華なスタイル。一人客が多からうというわけか、シャレたカウンターは中国では見当たらない。ステージにはマイクとともにイスでも。歌うのに立つてでも、座つてもどうぞ、ということなのだろう。中國の本場だけあって中国語の歌のメニューは色とりどり。カウンターで中国産「青島啤酒」をチビチビやつていた。

小姐「你好! 隣に座つていい?」

「うーむ」

(隣に勝手に座りこんで)

小姐「一緒に歌わない……それとも踊らない?」

その種の女性なのかと、それにしてもここは中国なのにと思ったが、北京からこれだけ離れていればしないがないのだろ。適度にビールを飲み、中国の歌を

で、新しくできたという上海人「お勧め」のカラOK俱楽部に入った。さらびやかなクラブはやはり、上海人好みか? 新建築での特徴は、大きなフロアとともに個室が増えていることである。入口を通ると、個室群がエンエンと続く。案内小姐に尋ねると、大きなグループから小さなものまで、そして料金に関して

も、どんな希望にも応じられる態勢とか。さすが、上海人ビジネス。ところてこの姉妹は、姉のほうは日本語の達人、妹は英語を自在に駆使するエリート中国人。それぞれ習得した両方の言語を使いこなす職業に就いている。姉は外国人を扱う中国では有名な旅行社社員として、急増する海外からの旅行者相手に中国を紹介している。妹はアメリカの船会社の上海支店で各種英文の船荷書類をテキパキと処理している。そんな姉妹と連れだってのカラオケ訪問。それぞれが得意の分野の歌を披露。姉は日本の歌を、妹は英語の歌を、そして当の私は習いたての中国語でと。三ヵ国語が飛び交い、かくしておかしな上海カラオケ・ナイト